

次のエピソードを踏まえて、子どもを理解するとはどうあるべきか、あなたの意見を 800 字以内で述べなさい。

A 夫が登園するところを私は出迎えた。A 夫は私を見ると、母親から手をはなして私に手さしのべ、数歩私に向かって歩いてきた。私は、A 夫は母親から離れてひとりであそぶつもりになってここに来たのだと思った。私の両手につかまって、私は歌をうたいながら部屋のまわりを歩いた。A 夫は私の手をはなさないのだが、A 夫自身のゆきたい方向があることを指先に察知できるので、子どもがゆく方向について歩く。衝立のわき、椅子の下、ピアノの鍵盤などでちよつと立ち止まってまた歩きつづける。私の手をつないだまま、庭に出て、水たまりに入る。いくつもの水たまりを歩いた後、自分から部屋にもどった。手で回す玩具に、最初はそつとさわわり、次第に自分の手で何度も回す。

A 夫が歩くことには、自分で思う方向に、自分の空間をきり開いてゆくよろこびが感じられる。歩くことは運動機能の練習だけのことではない。自分の手で玩具を何度も回すのも、自分の手を自分で使うことによるよろこびである。小さなことでも、自分で思うようにすることが人に自由感を与える。A 夫が歩くこと、物をいじめることは、この子どもの中に開けてきた自由感の表現であるように思われた。私は、この子どもと半日歩きまわりながら、小さな自由と一緒に味わった。

A 夫は、私の手をつかんで歩きながら、ところどころで立ち止まった。衝立、椅子の下、ピアノの鍵盤、水たまり、回る玩具等、そのひとつひとつの行為は、これからこの子どもに展開される世界の可能性を含んでいるかもしれない。この日は、A 夫は立ち止まりたいと思うところで立ち止まり、ゆきたいと思う方向に歩いた。A 夫は、つかまっている私の指先から、自由に動くことが承認されているのを感じとったのだろうと思う。

出典：津守 真『子どもの世界をどうみるか 行為とその意味』日本放送出版

協会 1987 年 5 月 20 日 第 1 刷発行 134~135 頁